

平成28年4月25日

「高師浜にミニ砂浜をつくろう会」活動の概要

- 主催 CIFER・コア
(一般社団法人大阪湾環境再生研究・国際人材育成コンソーシアム・コア)
- 協力団体 大阪府水産課・港湾局、高石市、高石市教育委員会、高石市漁業協同組合、
社会福祉法人南海福祉事業会幼保連携型認定こども園南海愛児園、
浜寺公園自然の会、大阪湾見守りネット、さざなみ会、レッツビギン、
公益財団法人大阪府漁業振興基金栽培事業場栽培漁業センター、
NPO法人大阪府海域美化安全協会、大阪湾再生推進会議（順不同）
- 参加者数 144名
- 活動内容 13:00 開会
13:15 砂まき作業開始（砂は約20m³使用）
13:20～13:45 南海愛育園園児による稚魚放流
13:50～14:20 高石小学校3年生による稚魚放流
15:00頃 砂まき作業終了



■開会挨拶

1. CIFER・コア理事（大阪市立大学名誉教授） 矢持 進

本日、このように大勢の方々が参加して活動ができるのは、CIFER・コアの会員企業を始め、サポーターの皆さんのおかげである。今、大阪の海はだんだんきれいになり、水質も良くなっていることが調査結果でも明らかだ。しかし、このような浜が減少したままで復元されていないことが課題の一つである。規模的には小さいが、人を海辺・浜辺に近づけるためにこのような浜を整備することが大阪湾の再生の基本であると思っているので、怪我のないように汗をかいていただきたい。本日の参加に感謝する。



2. 高石市長 阪口 伸六 氏

皆さんこんにちは、今日は良く来てくれたね。南海愛児園の子供達、本当に海を愛する若者やおじさんたちの手によって、高師浜の再生といえますか、活性化がスタートすることは本当にありがたいことである。



「音に聞く高師浜のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ」という歌が百人一首にある。この高師浜は昔から白砂青松があり、風光明媚な場所であることを詠っている。この浜は高石から北は堺、南は松ノ浜、泉大津までつながる長くて素晴らしい砂浜の海岸で、後ろには松林が続いていた。古来、紀州の熊野詣が盛んで、船でこの沖を通った人たちは、この風景を海から眺めた素晴らしいものであった。

大正、昭和にはここが海水浴のメッカとなり、7月、8月のワンシーズンに100万人が海水浴に訪れた。今となっては、その砂浜の名残があるのは唯一この区画だけとなって、他は港湾や防波堤として整備され、臨海部にも工業地帯ができた。

唯一残されたこの自然を何とか生かしたいと話したところ、それに応えてCIFER・コアが本日のイベントを開催してくれた。この砂浜の再整備のスタートであり、稚魚の放流も行うので後ほど高石小学校の児童も参加する。本当にありがたいことで感謝する。青い松は浜寺公園の中に残っており、この砂を私たちはこれからも大切にしていきたい。

近代になって、この前の浜寺水路には漕艇センターができたが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、キャンプ地として名前が挙がっており、視察の話もある。

また高石市臨海部では進出企業が産業振興に努めており、非常に元気のある日本のエネルギー産業を牽引している。今の時代にも着実に大阪湾の中で役割を果たしている。本日の高師浜再生のスタートを契機に大阪湾周辺が益々発展することを私たちも全力で応援したい。

本日まで参加の皆様のおかげで厚情、ご理解、ご支援に高石市民を代表して感謝するとともに、市でも高師浜を活性化させる取り組みとして工場夜景ツアー等にもチャレンジしているので、よろしく願います。

■説明

1. 浜寺公園自然の会会長 本多 俊之 氏

私たちは大阪湾の数十カ所で同時に実施されている「大阪湾生き物一斉調査」に参加し、平成20年からこの高師浜の担当として生物調査を実施している。ここでは海に関する生き物が80種類ぐらい観察されており、そのうち6種類ぐらいが大阪府の絶滅危惧種に指定されている。どんな生き物がいる

のかを知っていただき、本日砂を入れるうえで配慮をお願いしたい。

まず植物だが、すぐ目の前に広がっている濃い緑の植物がハマヒルガオで、来月になるとヒルガオのようなきれいな花が咲く。この浜の北の草地にもまじっているが、ここではハマヒルガオは陸上植物との生存競争に負けるので海寄りに生育している。また、オカヒジキがある。海浜性の植物で堺市では絶滅種となっている。今日は見られないと思うが、ツルナというものもある。

ハサミシャコエビというエビの仲間が、これから波打ち際に大きな巣をつくって現れると思う。波打ち際からいま干潟になっている部分にウミニナという貝がはい回っているが、これは去年初めて確認された。大阪湾の水質が良くなってきている証だと言われており、少しずつ増えている。干潟の表面の汚れを餌としてきれいにしている。

波打ち際にも草の生えているところにも大事な生物がいるので、その辺りを避けて砂撒きをしていただきたい。

ここは高石市で唯一残された浜であり、今後、このような浜がもっと広がることを願っている。



2. CIFER・コア事務局

- ◇本日は気温25℃の予報があったが、体力等を自己診断して活動していただきたい。
- ◇安全第一、健康第一で無理をせずに活動していただきたい。
- ◇この浜では毎日清掃活動をしているので、すぐに砂撒きに入りたい。
- ◇砂はバケツに入れすぎないようにし、先ほど本多さんから説明のあったように生物に注意して撒いていただきたい。

■稚魚の放流

栽培漁業センターの職員が稚魚を小さな籠から大きな水槽に入ると、子どもたちから「オー」、「スゴイ」という歓声が一斉にあがる。



〔辻村 浩隆 主任研究員の説明〕

今日、放流する魚はヒラメである。水温が上がってくると卵が生まれ、しばらくは、プカプカ漂う生活をするが、目の前にあるような2cmほどの大きさになると砂地のところで生活するようになる。さらに、大きくなると沖に行き、12月頃に30cmほどになると、漁師さんが獲ってみんなの食卓に並ぶようになる。今日、放流するものは栽培漁業センターで育てている親のヒラメが生んだ卵から孵化したものを2月頃から育てたものである。ヒラメをよく見ると左を向いている。似た魚にカレイがいる。ヒラメは他の魚を食べるので口が大きいので、放流するときによく観察してほしい。



1人5匹ずつのヒラメを用意しているので、「大きくなって戻ってきて」と声をかけて放流すること。

■事務局から

今回はこのイベントへの事前参加申し込みが少なかったが、開始時間になると1社で10数人が参加したCIFER・コア会員や市広報誌等で参加した地元市民も集まり、砂浜は手狭になった。

青い帽子をかぶった園児一行24名が愛らしく行進してきて、大人と一緒に写真におさまる。砂撒きが始まると園児は大阪府栽培漁業センターの職員から魚の話を聞いて、バケツに入った稚魚を一人で放流。潮の引いた浜は泥状で足元が悪いため、大人の参加者は園児が歩きやすいように足場板を自発的に並べ替え、水際までの誘導も行ってた。事務局の行き届かない点をフォローしていただいたことに感謝。

阪口高石市長は、スコップを手にとり、バケツや一輪車に砂を入れていたが、そのうちに自ら一輪車で砂運びを始めた。この砂浜は移動距離が長いので、一輪車を扱うのも大変だが、市長はなかなか上手だ。

そのうち、紅白の帽子をかぶった高石小学校3年生42名が到着し、園児に続いて稚魚放流をしていたが、次に砂浜を見ると生徒が砂の入ったバケツを二人で、あるいは一人で運んでいた。大人の行動を見ていて自発的に始めたのであろうか。予定にはない行動だったので驚いた。高師浜で砂を運んだ記憶をいつまでも心にとどめ、砂浜や自然を守る心を忘れないでほしい。

こうなると大人も頑張らざるを得なくなる好循環が生まれたようだ。

高師浜では毎日、清掃活動をしている男性やレッツピギンという清掃団体がいる。このイベントの準備等で来た時に、浜の端に集めたゴミの袋の山があって、いつ来ても浜がきれいに保たれていたのは、この方々の活躍のおかげであることがわかった。

万葉集や百人一首に詠まれたこの砂浜は、今では80mほどの間口しかないが、芦田川のポンプ場から芦田川の河口付近まで砂浜を整備することができれば、連続性のある広々とした砂浜になると、人びとで賑わっている浜の風景を夢想した。



～活動風景～

